カナダ人物記③

脳神経外科の世界的権威
ウィルダー・ペンフィールド

てんかんがまだ医学界で治療不能の病いとして見放されていた時代に、ペンフィールド博士は早くからこの病気に取り組み、周囲の無理解にもめげず幾多の手術を成功させてきた。

一九三一年のある日、モントリオールのマッギル大学病院の手術室では、ペンフィールド博士の執刀でてんかん患者の脳手術が行われていた。

後に記憶メカニズム研究の転機となった歴史的出来事が起ったのは、手術も半ばに達した時だった。探針が患者の側頭葉の一部にふれた瞬間、患者は遠い過去の記憶をまざまざと蘇らせ、博士らに語り出したのだった。

博士はそれまでの研究から、脳のどの部分がからだのどの部分につながっているかという脳皮質の身体機能地図は知っていたが、古い記憶の再生を掌る特定部所があるという発見は、新鮮な驚きであった。

それ以後、博士は、手術中に同様の現象に何度も遭遇する。そしてこれらの現象から博士が後に明らかにした理論は、〝人間研究の転機〟として評価されている。

ウィルダー・ペンフィールドは、一八九一年、米国ワシントン州スポケーンに生まれた。プリンストン大学を卒業したあと、オックスフォード大学で外科医としての修練をつむ。

一九二六年にいったん米国へ帰った後、再びオックスフォードに戻り、ここで神経科の世界的権威チャールズ・シェリントン卿に出会い、神経外科をライフワークに選んだのだった。

博士がニューヨークのプレスビテリアン病院に勤務する頃は、すでにこの分野での名声も高く、彼の研究と手術の腕は各所で注目されていた（この病院で彼は脳細胞研究室を創設）。そして一九二八年、彼はモントリオールのマッギル大学に招へいされたのである。

オックスフォード留学時代すでに、有名なカナダ人医学者ウィリアム・オズラーの影響を受けたペンフィールドだったが、モントリオールに移住後は、次第に深くカナダという国に惹かれていく。モントリオールに移った博士は、脳の病気を専門に治療・研究する機関の設立に努力を傾けた。この夢はロックフェラー財団やカナダ篤志家の協力で一九三四年に実現し、モントリオール神経研究所（MNI）が発足した。

MNIはペンフィールド所長の下で世界中の脳神経外科医のメッカとなり、患者も世界各地から押し寄せた。博士は在任中の四十年間に、千件以上の手術を行っている。

博士によれば、人の脳細胞には〝時間（ストリーム）の糸（オブ・タイム）〟があって、見たり聞いたりしたことを、ちょうど映画のフィルムのようにこの糸に焼きつけていく。それと同時にその記憶のインデックスも作成されるので、人は必要な時に必要な記憶を呼び戻すことができるのである。

ペンフィールド博士

博士の記憶メカニズム理論は、いろいろな分野で応用価値を持っているが、とくに教育の分野で大きな効用を示した。

ペンフィールド博士は、激務のかたわら何冊もの医学書を著し、時には伝記や歴史小説まで書いている。米国神経学会の会長をつとめたし、英国メリット勲位や仏レジョンドヌール勲章を受け、ソ連科学アカデミー会員にも選ばれた。

だが、こうした公式の最高栄誉より、もっと博士を喜ばせたのは、おそらくカナダ国民が博士に抱いた敬愛の念だったのではなかろうか。ペンフィールド博士は帰化カナダ人ではあるが、晩年、「現代の偉大なカナダ人」の人気投票で、いつも最高位に選ばれた。けだしそれは、博士の、信念を貫く医者としての真摯な態度と、患者に対する深い愛情が人々に愛されたからであろう。

博士は一九七六年、著書「心の神秘」を出版して間もなく亡くなった。

編集後記

札幌で開かれていた第五回日加経済人会議が終わりました。今号は、民間レベルにおける日加間の緊密な協力関係とその将来性を示す日加経済人会議について、そして相手側とのかかわりや期待について、日加双方の経済人に書いていただきました。

○カナダの永年の希望であった憲法移管が実現しました。カナダは一八六七年に建国され、一九三一年のウエストミンスター条約で主権を定全に取得したものの、形式的とはいえ、憲法改正のたびに英国議会の承認をとりつけなければなりませんでした。四月十七日をもって、こうした変則的な状態に終止符が打たれ、カナダはまさに植民地時代の〝最後の名残り〟を断ち切ったわけです。

○これで憲法に関する問題がすべて片付いたわけではありませんが、まずは憲法移管と「権利の章典」の明文化を喜びたいと思います。

（吉田）

本紙中の意見や見解は、必ずしもカナダ政府またはカナダ大使館の考え方を反映するものではありません。また公式文書の翻訳は仮訳です。転載の際は、できるだけ出典を明らかにして下さい。ご意見やご希望は左記の住所にご連絡下さい。
〒170 東京都港区赤坂七丁目三—三八
カナダ大使館広報部